

本日の学び:「ヤコブ、エサウとの再会」 テキスト:創世記33章1-20節

【理解の手がかりとして】

本課の場面は、主題の通りヤコブとエサウとの再会の場面である。前段にあったように、エサウは400人の者を引き連れてきた。それに対してヤコブがとった手段は、ラケルの召し使いビルハとその子ら(ダンとナフタリ)、そしてレアの召し使いジルバとその子ら(ガドとアシェル)を先頭に置いた。続いて妻レアとその子ら(ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ゼブルン、ディナ(女子))を置き、最後にラケルとその子ヨセフを置いた。

このように、最後尾(守るため)にラケルとヨセフを置いたのには、ヤコブの愛情の傾け方が如実に表れていると思われる。これまで「偏愛」の課題につき縷々学んできたが、母リベカのその性質がその愛息ヤコブにも表れている。もともとラケルに惹かれ、彼女との結婚を欲したという経緯があり、実際にヤコブはその子ヨセフを偏り愛したのであろう。そしてそのことが後に37章で、鼻買されていたヨセフに対する他の子らの反発という形で表れてくる。

さてヤコブは兄エサウの前に来ると「七度地にひれ伏した」(33:3)。「地にひれ伏す」というのは、臣下の者が主君の前に進み出る時に行うものである。実際「七度」であったかもしれないし、「七」は完全数であるので、「完全に降伏した」という意味であるかもしれない。

ここで押さえたいのは、27章の所で「母の子らはあなたにひれ伏すであろう」(27:29)との祝福(父イサクを騙して得たもの)と逆のことが起こっているということ。しかし、その先の歴史を見渡してみると、ヤコブの子ヨセフはエジプトに売られ、その後宰相になり、ヤコブの子ら(ヨセフの兄弟たち)が彼に「ひれ伏し」(44:14)ているので、27章の祝福は結果的にそうして実現していくことになる。

さて、ヤコブがあれほど恐れていたエサウとの再会は、予想だにできなかったエサウの態度によって感動的な和解の出来事となった。「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」(33:4)という振る舞いは、ヤコブはもとより、読者である私たちにも大いなる驚きを与える。そして、新約の「放蕩息子のたとえ」にある父親の振る舞いと重なる思いもする。

その後ヤコブは、エサウに聞かれるままに、一緒にいた女性たち、子どもたちを紹介する。そして彼女らもエサウの前に「ひれ伏し」(33:7)た。続くエサウの質問(贈り物の家畜)に対してヤコブは「御主人様の好意を得るためです」(33:8)と言うのだが、ここで彼が用いた「御主人様」はヘブライ語でアドナイである。この言葉は臣下が主人に対して使う言葉であったので、前段の文脈からも違和感はないが、この「主(アドナイ)」という言葉は、信仰的には神に対する呼び名(神名を直接呼ぶことを避けるための呼称)であることを考えると、色々と深く考えさせられる。

それに続くのが「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます」(33:10)というヤコブの言葉。つまりは、この時ヤコブは、兄エサウと対面しながら、しかしそこに、「神との対面」(神へのひれ伏し、神への悔い改め、神へのささげもの)という思いも込めているのかも、との想像を豊かにさせられる。そしてそこに「主(アドナイ)」との呼び名が表された意味をも重ねて理解させられる。※もちろん、エサウは神ではないし、人間を神格化することを是としているのでは決していない。

こうして、エサウとの再会が無事に済んだ。エサウはヤコブからの贈り物を受け取った後、ヤコブに自

分が住んでいるセイルと一緒に言おうと言うのだが、そこは「生まれた地、親族のもと」(31:3、13、32:10)カナンではなかったの、丁重にその誘いを断ったのであろう。その断り方は非常に賢く、エサウの善意に対して礼を尽くしているようにも見えるが…しかし体の良い断りである。エサウの振る舞いには感銘を受けるのとは対照的に、ヤコブの時折の振る舞い(ごまかし)は余り感心させられない。

ヤコブという人物像をどう受け止めるか、…「人をだますヤコブの本質は、イスラエルと名前を変えても変わっていないようです。しかし、ヤコブがうそをつく記事は創世記では、これが最後となります。ヤコブが一拳にイスラエルに変わったのではなく、少しずつ変わっていく様子を創世記では書いているのではないのでしょうか」(加納貞彦)。

エサウはセイルへの帰途につき、ヤコブはセイルへの方角への道はとらずに、スコトに移る。そこでヤコブは家を立て、相当長期間いたものと思われる。そしてその後、カナンの地であるシケムに着く。その土地を購入し、そこに「祭壇を建て」(33:20)、その地を「エル・エロハ・イスラエル」(至高神、イスラエルの神)と呼んだ。

今一度、ヤコブという人物像をどう受け止めるか、…「もともと、ヤコブには人一倍用意周到で、知恵が働き、器用に、うまく立ち回る面がありました。けれどもそれが神に用いられたものではありません。あくまでも主の御前に立ち、うれしくても悲しくても、良きにつけ悪きにつけ、神の御前で時を刻み、明確な区切りをつけ、祈りと賛美と感謝と礼拝のうちに、自らの歩みをその都度整理し、新たなる力を得て、次の一歩へと旅立つ点にこそヤコブらしさはあったのです。」(佐藤彰)

兄弟間(あるいは他者と)の確執、それも自らに起因する問題、そこで抱える恐れ、そこで相向かい合う出来事、そして和解、その節々で神の御顔を仰ぎつつ歩む経験、がこのヤコブ物語にはある。そしてそれらは私たちにもある経験である。そしてその節目々々で方向が修正させられるのは「礼拝」の経験ではないか。「神の御前で時を刻み、明確な区切りをつけ、祈りと賛美と感謝と礼拝のうちに、自らの歩みをその都度整理し、新たなる力を得て、次の一歩へと旅立つ」…「祭壇を建て」(すなわち「礼拝する」)とはこういうことであろう。

『聖書教育』より

「壊れた関係が回復するには時間がかかるとは思いますが、…簡単には埋めることのできない溝を経験したことがありますか」(大人クラス)…この想起から祈りへ。